

養鶏技術

鶏の呼吸器病の症状と予防

岡山県養鶏試験場技師 植月昌彦

鶏の呼吸器病ほど種々雑多な病気はありません、これはどんな伝染病でも同じですが、急速に伝染し非常に大きな害を養鶏家に与えます。これの予防ならびに治療には、古くから多くの人々が頭を悩まし、極端な言いかたをすれば、このために破産をした人もあるくらいです。不幸にして人智は、呼吸器病の原因であるウイルス、細菌を完全に撲滅する方法を発見できず、わずかに抗生物質の発見によって、攻撃を始めましたが、敵もこれの防衛策を研究するといった調子で、永遠にこの病気を消滅させることは不可能と考えられます。しかし、これを無策のままに傍観することはできません。これから、この症状、治療法などについて考えて見ることにします。

呼吸器病の主なものは、伝染性気管支炎、慢性呼吸器病、伝染性鼻カタルであり、これらの症状ならびに原因を説明します。

伝染性気管支炎

本病の病原体は非常に小型のウイルスで、感染の方法が空気伝染であり、潜伏期間が短いために、伝染が速く、秋から春にかけての寒冷時に流行します。

症状が軽く、また感染していても発病しない場合が多いので、気づかずに過してしまうことが少なくありません。しかし、産卵鶏では、産卵の不調が長期間つづくので、養鶏家のこうむる被害はきわめて大きいものです。

症状は鶏の年齢によって、程度の差はありますが、共通した症状は呼吸器症状であり、成鶏では奇声を発したり、せきをします。ふつう1週間くらいでこれらの症状はなくなり、この頃から産卵は急激に低下し、これが半年以上もつづき、この期間には奇型卵が多くなりますが、他の病気と合併しなければ死亡率は非常に低いものです。しかし、幼すうではきわめて高い死亡率を示します。これは気管などにたまった滲出物を口から吐きだす力がなく窒息死するからです。健康鶏の気のうが無色透明であるが本病

に侵されたものは不透明で、こんだくしており、場合によってはチーズ様の不潔物が付着しています。このほか産卵鶏では卵ついがあつたり、出血あるいは不整形の卵子が卵巣についています。

慢性呼吸器病 (CRD)

本病の病原体はP P L O (プリューロ・ニューモニア・ライク・オーガニズム) といわれる細菌のなかでも1番微小な菌で、ウイルスの性状によく似ています。このP P L Oの仲間、鶏や七面鳥だけでなく、豚や牛にも特殊な病気を発生させており、人間の病気にも発見されています。

CRDは、ニューカッスル病や伝染性気管支炎などのワクチン接種時、天候の急変などのストレスのあと、体力の低下時によく発生します。CRDの恐ろしさは、白痢菌と同じように介卵性に伝染することです。したがって、中すうから大すう時代に発生しやすく、死亡率も高いもので、空気伝染、接触伝染もありますから充分注意しなければなりません。

症状としては、成鶏からひなまで大体同じ症状を示しますが、はじめの病徴は水様性の鼻汁をだし、これにつづいて奇声を発し、くしゃみをするようになります。しばらくすると涙を流したり頬の腫脹などの症状が現われ、産卵鶏では産卵が減少するが完全に停止することはありません。本病を他の呼吸器病と区別するためには血清反応が確実に便利です。

伝染性鼻カタル

本病の病原体は、ヘモフィルス属の細菌やコッコベチルスという細菌で、病気が進むとこれらの細菌は影をひそめて、かわりに大腸菌、ブドウ状球菌などの雑菌が繁殖し、ジフテリア様の変化を起します。この病気は、感冒、ジフテリア、コリーザ、ハナケ、メケとも呼ばれ、四季を通じて発生し、鶏舎の不潔、密飼い換気不良がこの病気を誘発します。

症状は病原体の繁殖する箇所によって多少のちが

岡山畜産便り 1964.04

いはありますが、眼がおかされたものでは、初期は涙をだし、ついで眼がはれてきて、最後には失明するようになります。ふつうループとっているのは、このような症状のものをいっています。口がおかされると、口の粘膜に点または斑状の白いかたまりがみとめられ、ついでジフテリア性擬膜ができる、このころから異状呼吸音が聞かれ、この擬膜が咽頭部にまでできると、窒息死するものもでてきます。鼻がおかされた場合、水様性の鼻汁をだし、これがしだに粘膜となり、ついには乾燥して鼻腔のまわりに膠着して鼻の孔をふさぐようになります。本病は眼、口、鼻の分泌物が特臭を發します。

予防と治療

以上で、3つの型の病気の原因、症状の説明を終り、予防、治療については、全体的に考えてみることにします。

(1) 病気は予防するものであって、薬品によって治療するものではありません。したがって、病気について正しい考え方をもち、よい鶏を飼うこと、よい環境設備をつくること、消毒を念入りに行うことであります。

(2) 呼吸器病はすべて粘膜を侵すものですから、これの保護作用のあるビタミン類などの欠乏のないように注意すること。このビタミンは、A、B、C、Dなどですが、これらのものは完全配合飼料に配合してあることになっていますが、長期間貯えたりすると効果がなくなりますので、この点の注意も必要です。

(3) 鶏痘と呼吸器病は非常に関係がありますので、これの予防接種も忘れてはいけません。予防接種時に注意しなければならないことは、孵化時から4週令位までは善感せず、4～9週令が善感しますから、初生時と、7週令頃の2回予防接種をされる必要があります。労力などの関係で、1回の接種をされる場合は4週令頃が適当でしょう。

(4) CRDに対して、ハイレベル・フィードを給与する方法が、アメリカのプロイラーで行われています。これを多少変更すれば他の呼吸器病にも適用することができます。これは初生ヒナに5

日間は抗生物質（クロルテトラサイクリン・オキシテトラサイクリン）を飼料1 t当り 100～200 g 添加した飼料を給与し、ついで約4週令時またはワクチン投与時に、再びハイレベル・フィードを5日間給与する。このように、呼吸器病が発生するような時期にこのハイレベル・フィードを給与する方法であります。この方法は飼料に添加するものですが、これを変型して飲水に添加する方法も可能であると考えられます。この場合にかぎらず抗生物質を使用する際には、カルシウムの添加を0.5%位にすると、効果を增強することができます。

(5) 実際に発生した場合には、伝染性鼻カタルを除いて、伝染性気管支炎、慢性呼吸器病は薬品によって治すことは不可能で、わずかに二次感染を防ぐのみですが、一般に使用されている抗生物質の使用量(成鶏)はペニシリン1万単位筋注、ストレプトマイシン40mg筋注、クロルテトラサイクリン・オキシテトラサイクリン0.1%溶液等であります。

(6) 点灯を廃止する時期、防寒設備を取り除く時期などは、この方法を誤ると、呼吸器病が多発することがありますので、注意することが必要です。

(7) 病気を早期に発見することは、治療を簡単にし、回復を早めます。呼吸器病が発生しやすい時期には、週に1～2回、夜間の巡回をするのが良いと思います。昼間は聞くことが困難な以上呼吸音が良く聞かれ、比較的早く治療をすることができます。

以上で、鶏の呼吸器病の症状、対策、治療などについて、簡単に説明いたしました。最終的には病気を発生させないことであり、このためには鶏の身になって、管理などを考えるべきだと思います。

最後に、お断りしておきますが、文の中で用いました数字、あるいは期間などは、一般的なものであって、そうとうの中があることを、お忘れになりませんようお願いしておきます。